

町史のひとこま

(第二十七回)

万葉集「志可の浜辺」の歌

今回は、町境を少し越えた話になります。万葉集の歌で、昔から論争のタネになっている話題を取り上げてみました。

志可の浜辺——はづいか？

万葉集五六六番に大宰府の役人・大伴百代の歌が載っています。

草枕旅行く君を愛しみ

副ひてそ来し志可の浜辺を

右一首、大監大伴宿祢百代

(日本古典文学大系4)

この歌には、歌のできたいきさつを記す左注があり、それによると——

天平二年(七三〇)のこと。

時に大宰帥(大宰府の長官)として筑紫歌壇の中心にあった歌人・大伴旅人が病の床につき、朝廷から旅人の近親者二人が朝

廷の使者としてはるばる九州まで見舞におとされたのでした。

旅人の病も回復し、使者二人は都に帰ることになって、旅人の子・家持や、大宰府の役人たちが見送りに出ました。

一行は、離れがたい気持ちか

らなかなか別れることができず、ついに「夷守の駅家」まで同行し、酒をくみかわしながらこの歌を詠んだのでした。

これから旅に出る人たちと名ごりがつきず、とうとう「志可の浜辺まで連れ立って来てしま

った」という意味で、志可の浜辺は夷守と近接しているはずで

す。そして、江戸時代から「志可の浜辺」の位置をめぐって論争が起きました。

の浜辺ではありえないのです。それは一行は陸路都に上ろうとしているので、志賀島を通るはずがないからです。

青柳種信——志賀神社説

福岡藩を代表する国学者・青柳種信は、その著「筑前国統風土記拾遺」の中で、夷守は今粕屋町の「日守」の地で、志可の浜辺とあるのは、同じく仲原の志賀神社付近であるとの説を出しています。



志賀神社 (粕屋町)

志賀神社は、36番天神行のバスで熊崎バス停にある神社です。一見古墳の上に鎮座するかのよう

に思われ、江戸時代にも「田舎にしては好祠(立派な神社)である」とされています。

種信は、この付近は必ず「志賀」という地名だったであろう、この付近まで海岸線で、当時は

一帯を志可の浜辺と呼んだものであろうと推測するのです。

現代の学者の研究では、縄文時代(約二千年前まで)の海岸線は原町・乙仲原から乙植木・五坑ボタ山を結ぶ線と考えられており、万葉の時代にはかなり

海退現象が見られたにしても、志賀神社付近に海岸線のあった可能性は十分にありま

す。なお、奈良時代には粕屋郡に九郷があったのですが、その内「阿曇」「志珂」の二郷を志賀島に

呼んでいるのです。(粕屋町付近が志珂郷ということになれば、わが町の一部も志珂郷に属した可能性が出てきますが、史料不足で今一つ確証が出ていません。)

伊藤常足の反論

これに対して真つ向から反論を投げつけたのが「太宰管内志」の著者・伊藤常足(鞍手郡の神官)です。

しかし、伊藤も左注と歌の意味とがそのままでは両立しがたいことを認めているので、批判の声も小さくなりがちです。伊藤は志可の浜辺は志賀島とする説ですが、どこかに文字の写しまちがいであつて矛盾が出たのだからと言っています。

このように万葉集「志可の浜辺」の歌は論議を呼んでいるのですが、志賀島資料館でも志賀島を詠んだ歌の一つにあげていますが、一般にはそのように通用しているようです。私は青柳種信説に傾いているのですが……

(町誌編集委員会事務局・石瀧)